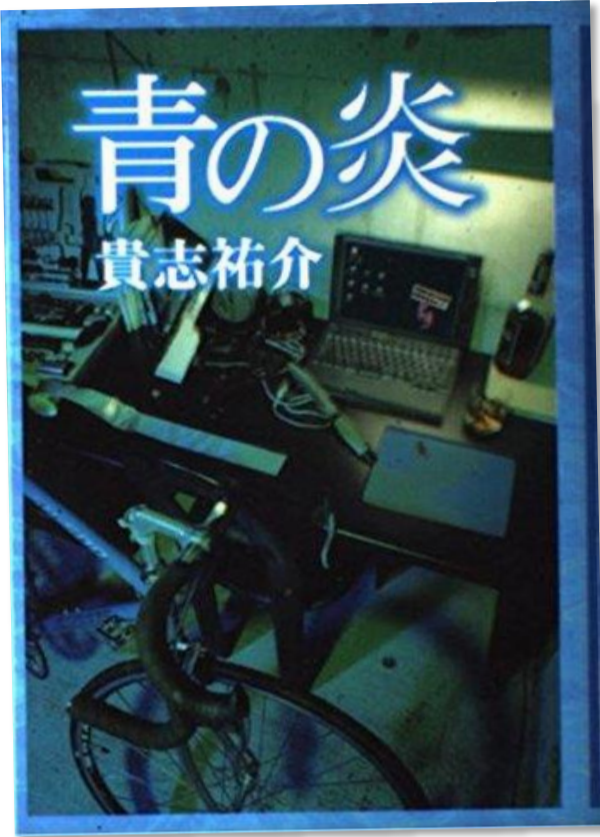


あなたに薦める『この一冊』2月

『青の炎』 貴志祐介[著] 角川書店

国語教諭 高島 拓倫
高校 3年3組 副担任



「—— こんなにも切ない殺人者がかつていただろうか。」

そんな帯がついている本に出会ったのは、17歳の時。
主人公はクラスに一人はいそうな秀才タイプの高2男子。彼は家族のために完全犯罪に挑む、というストーリー。

「安っぽい」と思った？ とんでもない。秀才だからこそ組上げていく緻密な殺人計画は、「現実に来てしまいそうな」感覚を私たちに植え付けてくる。

中学・高校生にリアルな殺人小説を薦めるなんて、と思う人もいるかもしれない。

でも僕は今の中高生たちに必要なのはそういうものじゃないかと考えてる。一言で言えば「毒を飲んで薬を考える」ってことかな。人の命を奪おうと考えた理由は？ 手段は？ それは人間として許されることか？

一人の人間として善悪を考えるには、ちょうどいい本だと思う。

お釈迦様は成人するまで人の醜い部分を見たことがなかった。大人になって初めて見てショックを受け、仏教を創めたという。宗教の開祖になれなんて言わないけど、人間としての「基準」くらい自分で考えたっていいんじゃないかな。

「良質な毒」を飲み干す。そんな経験してみよう。

著者 貴志祐介 豆知識

[1959~] 小説家。大阪の生まれ。阪神・淡路大震災と多重人格障害をテーマとした「十三番目の人格（ペルソナ） ISOLA」で作家デビュー。「黒い家」で日本ホラー小説大賞受賞。他に「青の炎」「硝子（ガラス）のハンマー」など。

出典:デジタル大辞泉, JapanKnowledge Lib.

★高島 拓倫(タカシマ タクミ)先生の紹介★

*担当科目・クラス

現代の国語(高1年1~3組)

古典B(高3年2・3・10組)

*星座 → おうし座

*趣味 → 漢詩作り・アコースティックギター・旅行・詩吟・ゲームetc.

*自分の中学・高校生活

中学時代はなぜか同級生や友達にも「さん」付けで呼ばれることが多かったです。

(今もって理由が分からない...) PC部の部長やりました。

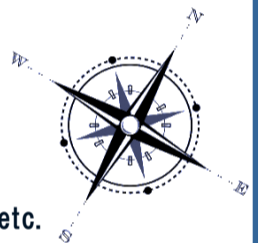
高校時代は完全に受験勉強漬けの三年間でした。(部活がそもそも無い!)

息苦しくはあったけど、国語で校内TOP3を争いまくってましたね。

*本校生の印象 → ありのまま

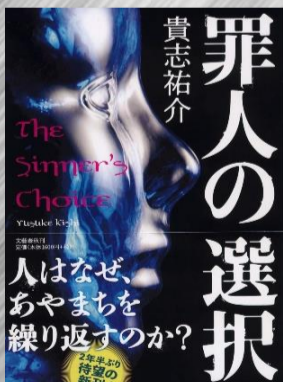
*感動した本 → 『孫子』孫武[著] 講談社

*読むことが望ましい本 → 『ペンギン・ハイウェイ』森見登美彦[著] 角川書店



図書館所蔵同著者の作品

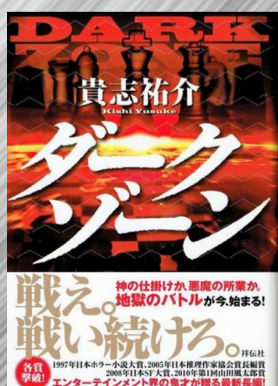
『罪人の選択』 文芸春秋



「赤い雨」は、パンデミックが起きたときあらわになる人間の本性を描いた一作。表題作は、著者自身が「ここまで強いテンションを維持した作品は、書いたことがありません」と断言する手に汗握るミステリー。人間の愚かさが絶望で世界を塗りつぶすとき、希望が一筋の光となって未来を照らし出す。

『ダークゾーン』 祥伝社

情報科学部学生で日本将棋連盟奨励会に属するプロ棋士の卵である塚田は闇の中で覚醒した。17人の仲間とともに。場所も状況もわからぬうちに始まった闘い。人間が異形と化した駒、「敵駒として生き返る戦士」などの奇妙な戦術条件、昇格による強化——“軍艦島”を舞台に描く、悪夢の世界!



その他多数所蔵しています

ぜひ教科書に載せて欲しい...
(中高生だから思う部分があると思います)

こちらも

本校

所蔵有!

ぼくはまだ小学校の4年生だが、もう大人に負けないほどいろいろなことを知っている。毎日きちんとノートを取るし、たくさん本を読むからだ。ある日、ぼくが住む郊外の街に、突然ペンギンたちが現れた。このおかしな事件に歯科医院のお姉さんの不思議な力が関わっていることを知ったぼくは、その謎を研究することにした。第31回日本SF大賞受賞作。



DVDも
あります



れっごー れっごー



編集後記:「手放しのハッピーエンドは現実にはありません。何を救い、何を犠牲にするのか。小説でも、その選択を描きたい」——これはコロナ禍の最中に著者・貴志祐介がインタビューを受けた際の言葉です。目の前、そしてまだ遠い何かや誰かのために、あなたができること、すべきこと、しなければならぬことはなんですか。読書でいっしょに考えてみませんか?